研究ノート

クラーラ・ツェトキーンの女性解放論にみる イスラム，アジア，非資本主義圏の捕捉

――没後75年によせて――

伊藤　セツ

Islam, Asia, and Non-capitalism Area in Feminist Theory of Clara Zetkin :
In Commemoration of the 75th Anniversary of Her Death

Setsu Ito

はじめに

2008年は，ドイツのプロレタリア女性運動の指導者であり理論家でもあったクラーラ・ツェトキーン（Zetkin, Clara 1857-1933，以下単にクラーラと略記する）の没後75年である．

2007年はクラーラ生誕150年であったから，75年生存したその年月と同じ時間がすでに経過したこととなる．このことを意識して筆者は，本稿で，クラーラの晩年の女性解放論の到達点を，彼女のイスラム，アジア，非資本主義圏の捕捉という視点から検討し，その問題点と限界をとりあげることとする．

クラーラは1919年までは，地域的にはドイツ・西欧，宗教的にはキリスト教圏，経済体制としては，資本主義的発展を遂げた国々を中心とするプロレタリア女性解放論者であった．もっとも，1907年，1910年の国際社会主義者女性会議では，U.S.A. との接触はあり，国際女性デーの実施国が1911年以来世界に広がって行くなかで，視野を広げていったことは事実であろう（伊藤 1984：310-332）．1915年の国際女性会議では，ロシアの女性代表たちとの接触があり，非欧米的な女性運動の歴史や考えと比較するようになる．しかし，クラーラが1916年まで編集したドイツ社会民主党の女性機関誌 *Gleichheit* の中に掲載されたクラーラの手になる記事にも，非欧米的なものはみられない．

クラーラの，地域的には東方，宗教的にイスラム圏の捕捉は，モスクワに本部をおいたコミンテルンとの関わりによって生じたものであり，1920年以降の書き物に現れるようになる．それから1930年代はじめまで，約10年，コミンテルンの中近東・極東への活動の広がりとともに，クラーラの目は東へ向う．モスクワを拠点に非西欧的な地域への旅と見聞から得たものを，非資本主義的な諸国の女性問題と関連させて意識するようになり，クラーラの書いたものには，中国，極東，日本への言及も見られるようになる．

1. 1920年代初頭のコミンテルンにて

1920年代を通じて，クラーラは，コミンテルンの女性運動の指揮をとったが，まず最初に，1920年「国際コミュニスト女性運動のための方針」を作成した．彼女は，コミンテルン全7回の大会のうち，4度の大会，すなわち，第3回大会（1921年），第4回大会（1922年），第5回大会（1924年），第6回大会（1928年）に出席したが，女性問題での大会発言の機会は，1921年の第3回大会での「女性運動に関する報告」（第20会議），1922年の第4回大会（第24会議）での「女性の間でのコミュニスト活動について」の2度であった．

まず，これらの発言の中で，イスラム・アジア圏，非資本主義圏の女性に関わるものを抜き出してみたい．以下邦訳は断りのない限り伊藤による（松原 1969）[1]．

(1) 1920年「国際コミュニスト女性運動のための方針」にみる「資本主義以前の発展段階にある諸国の方針」から

クラーラは，1920年晩夏，ソビエト・ロシアへの招待状を受け取り，シュツットガルトを出発して，ドイツからリガへ船で向い，最初ペトログラードへ到着した．そこで，働く女性・農村女性3,000人の集会に出席し，ラトビア経由でモスクワへ入った．コミンテルンは，1919年3月2－6日の日程で創立大会が開催されており，第2回大会は，1920年7月19日から8月7日までの期間にもたれ，この会期中7月30日から8月3日までは，「第1回国際コミュニスト女性会議」が開催されていた．従ってクラーラはここまではいずれの会議にも登場していない．

クラーラは，モスクワでは，1920年9月23-27日の間と10月23日，11月4日，レーニンと会っている．レーニンとの会話から示唆されたものも含めて，モスクワ滞在中に，コミンテルンの女性運動指導の出発点となった国際女性運動の方針を書き，コミンテルン執行委員会に提出した．執行委員会は11月はじめにこの「方針」を承認したが，そのなかから，本稿の目的に沿う箇所を取り出すと次の通りであった．

「資本主義以前の発展段階にある諸国の方針」

女性を，家内奴隷，労働奴隷，男性の快楽の奴隷に貶める偏見，慣習，風俗，宗教および法律文書の克服，―たんに女性を啓発するだけでなく男性の啓発をも前提としたその克服のためにたたかう．

1. 教育，家族，公的生活における男女の完全な権利上の平等のためにたたかう．
2. 支配的所有階級による搾取と圧制に反対して，貧困な搾取される女性を徹底的に守る．そのもっともはなはだしい被害は，特に協同組合によって緩和されてうるとはいえ，家内工業において生ずるのである．
3. 経済，および社会生活の前資本主義的形態をコミュニズムに導き，特に事実に即した可視的な教育を模範的におこない，個人的家庭経済は女性を奴隷にし，社会的労働は女性

1　出所の明記のないものもすべて松原（1969）に依拠している．松原は伊藤の旧姓である．

を解放するということを女性に示す諸措置を講じ，その諸制度をつくる．

前資本主義的発展段階にある諸国の女性のあいだで扇動活動や組織活動をおこなう場合には，特に，ロシア革命以来，東方諸民族の女性間で展開されたロシアの男女同志の活動によって集められた諸経験を役立てるべきである．

ここでは，「前資本主義的発展段階にある諸国」という表現で一括され，地域的・民族的には「東方諸民族」という抽象的表現であった．

(2) 1921年コミンテルン第3回大会での報告から

翌1921年6月22日から27日，コミンテルン第3回大会出席のため，クラーラは，長男マクシム，その妻でクラーラの秘書のハンナとモスクワへ向うが，リガでリトアニア警察に逮捕される．釈放の後，モスクワに入り，コミンテルン第3回大会に先立って開催された第2回国際女性会議に出席する．この会議には，28カ国の代表82名が参加していた．この会議こそ，国際女性デーをはじめて3月8日と統一した会議であるが，ここには，「東方」，イスラム教徒の女性もきていた．

クラーラは，この大会での「女性運動に関する報告」のなかで，「特筆に価する歴史的意義ある特色は，この会議に東方民族の女性の代表者が参加しているということである」と述べ，「東洋民族の女性代表の出席の意味」を次のように表現した．

「それは，東洋民族が目覚めはじめ，闘争にたちあがっていること，しかも抑圧されているもののなかでももっとも抑圧されているもの，すなわち，数百年，数千年の長きにわたって，きわめて古い宗教的・社会的信念，教義，習慣，風俗の束縛をうけて生活していた女性たちを，革命闘争に吸収することを意味します．近東および極東からこの会議に出席したことは，東洋の革命化がどんなに広くまた深くゆきわたってすすんでいるかの証拠であります．そのことはまた，わたしたち西洋人にとっても，すべての資本主義国のプロレタリアにとっても，非常に重要なことなのです．なぜなら，イギリスやフランスのプロレタリアートの解放の闘争は，たんに自国の大地でたたかわれているだけでなく，インドやペルシャの灼熱の広野でも，中国の各地でも，近東および極東のいたるところでもたたかわれているからです」．

この段階ではまだ日本の名は出てこない．

(3) 1922年コミンテルン第4回大会での報告から

1922年の国際女性運動は，1月22日から31日に開かれた第1回極東諸国勤労女性会議をもってはじまった．これは，イルクーツクで開催された第1回極東諸民族大会の開催中に，国際女性書記局が同大会への女性代表を招集して開いたものであるが，日本から1名，中国・モンゴル・朝鮮から各2名，合計7名の代表が参加した．この会議にはクラーラが参加した形跡はない．日本からというのは片山潜である．

この会議では，「ソヴェト権力と東洋の勤労女性について」（リヴリーナ），「東洋での活

動の方法および形態について」（ドルジニーナ），「飢饉について」（フルームキナ）が報告した．会議は二つの決議「極東諸国勤労女性の間における活動の基本原則，任務，方法および形態に関する決議」と「飢饉救済に関するフルームキナ報告における決議」と「極東勤労女性に対する女性分科会の呼びかけ」を採択した（村田 1979：561）．

その後，1922年3月6日，コミンテルン執行委員会幹部会会議の決定によって，国際コミュニスト女性書記局はモスクワからベルリンへ移転し，クラーラを責任者とし，モスクワには東方部を置いて，スミドーヴィチとカスパローヴァを責任者とし，ロシアと近・極東諸国を担当した[2]．

1922年11月27日のコミンテルン第4回大会での報告で，クラーラは次のように言う．

「私の報告でもっとも強調したいのは，とりわけ，遠大にして歴史的意味ある事実であります．それは，近東および極東において，困窮し，悩める女性たちが目覚めはじめ，コミュニストの旗のもとに結集しているという事実です．男女の同志の皆さん．そのことは，わたしたちがどんなに高く評価してもし足りないほどの意義ある事実です．事情はどうでしょう．そこでは，数百年来の，いやおそらく数千年来の古い偏見，部分的には，長期にわたって深く浸透してきた資本主義の発展—これは古いものを破壊し，死滅させることなしには新しいものを生み出すことのないものです—によってすら，根絶されることのなかった偏見にとらわれた女性大衆を啓発し，獲得することが重要なのです．資本主義はもちろんそこにも堂々と進入し，すべての女性大衆を，資本主義的搾取と従属の下に屈服させました．日本，インド，トランスコーカサス[3]，それに中国やその他の国々でも同じことです．しかしながら資本主義は，女性の古い社会的奴隷状態を根絶せずに，それを資本主義の目的に利用したのです」と．

クラーラは当時，ベルリンの国際コミュニスト女性書記局にありながら，モスクワの東方部の活動を把握した上での発言となっている．

2. コーカサスでの体験とイスラム女性組織との出会い

(1) 1923年のコーカサスでの保養，コーカサスという地域

1923年，クラーラはドイツでの活動の後，6月12-23日のコミンテルン執行委員会拡大プレナム出席のためモスクワへ行った．しかし，病気になり，歩くことが出来ず，担架にのって会議場に入り，「ファシズムに反対する」という演説を行った（SAPMO-BArch NY4005/78, Bl.66）[4]．

---

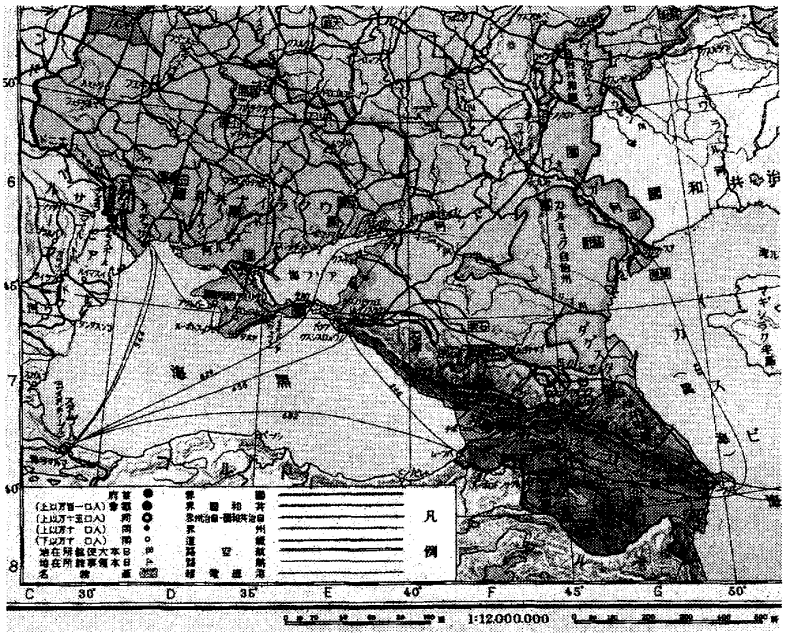
2 しかし1924年のコミンテルン第5回大会時に開催された第3回国際女性会議のあと両者はコミンテルン執行委員会幹部会の女性部に統合され，クラーラがその責任者となった．クラーラは，これ以降,東方への責任も負うことになる．

3 後に出てくるザカフカス（南カフカス）と同義．

4 この光景は荒畑寒村によって記述されている（荒畑 1961: 421）．また演説の全文は，クラーラ生誕150年を記念したヘルベーの編著に収録されている（Hervé 2007 : 85-115）．

その後，はじめてコーカサスの療養地グルジアのシェリエスノヴォストクに赴き，年末まで，温泉入浴，マッサージ，薬剤療法の治療を年末まで受けて半年間活動に参加しなかった．以後クラーラは，しばしばこの保養地にいくことになる．

クラーラは，コーカサスをしばしば東方と呼ぶが，コーカサスとはどういう土地だろうか．コーカサスは，ロシア語ではカフカス，地理的には，黒海とカスピ海に囲まれた温暖な地域の名称である[5]．中央に東西に走るコーカサス山脈があり，山脈の南はザカフカスと呼ばれていた．旧ソ連のヨーロッパ部分の最南端に位置していたザカフカスは，古代から複雑な民族が住んでいたが，現在，山脈の北はロシア，南にイスラムの国アゼルバイジャン共和国，キリスト教国のアルメニア，グルジアの3国がある．クラーラは，最初このグルジアの黒海に面した保養地シェリエスノボドスクに行ったというが，筆者は地図で確認できていない（地図）．



地図：ソ連時代初めの頃のコーカサス地方の地図

http://keropero888.hp.infoseek.co.jp/map/soviet01.html（2007.10.10アクセス）

ローザ・ルクセンブルクは，1908年から1909年にポーランド語で書かれた「民族問題と自治」のなかで，第5章の3節をカフカスの民族問題に割いている（ルクセンブルク1909＝1984 加藤・川名訳：193-198）．そこでローザは，「民族自治の問題が，その実施にあたって出会う困難のもうひとつの顕著な例が，カフカスに見られる．この地上のどこを探しても，カフカスほど，一つの地域に諸民族が複雑に入り混じっているところはない．太古の昔から，人々がヨーロッパとアジアの間を往来する場であったこの歴史的な地は，それぞ

5　1821年にプーシキンの，1830年にレールモントフ，1872年にトルストイの，同名の『コーカサスの虜』という作品がある地域でもある．クラーラがこれを意識したかどうか，今のところ不明である．トルストイとコーカサスについては糸川（2007：53-55）参照．

れの人々の破片でちりばめられている」として，1897年の人口調査から，900万人を超えるカフカス地方の21民族の数を調べる．

ローザは，「ロシア人以外の，比較的数の多い民族集団のうち，最大のものは，（中略）グルジア人となる．グルジア人の歴史的領域は，チフリス県，およびスフム郡とサカタリ郡を含んだクタイス県であり，人口は211万490人である．しかし，このうち，グルジア民族は，やっと半分を越える120万人しかいない」．「グルジアの中心にある旧首都のチフリスも，またどの郡の首都も，すべて，民族的にきわめて複雑な特徴を示している．そこでの優勢な要素となっているのはアルメニア人で，彼らがブルジョワ層を代表している．例えば，チフリスの人口16万人のうち，アルメニア人が5万5,000人，グルジア人とロシア人がそれぞれ2万人ずつ，残りはタタール人，ペルシャ人，ユダヤ人，ギリシャ人などである．（中略）チフリスやその他の都市をグルジアの自治地区から除外することは，グルジアの社会・経済的な諸条件からみて不可能であるが，他方，アルメニア民族の立場からすると，それらの都市をグルジアの自治地域に含めるのも同じく不可能である」．「これ以上に難しいのは，残りのカフカス山岳系諸民族に適用した場合の自治の問題である．それらは地域的に混在し，各民族とも数的に極端に小規模である．経済的・社会的諸関係も，圧倒的に牧畜段階に留まっていて大概は放牧，ないし原始的農業の段階にある」としている．

ローザが例示したコーカサス地域は，ナポレオン戦争の後，ロシアによって征服されていたが，1905年以降，民族解放運動が高揚し，1917年のロシア革命ののち，ブルジョワ民族主義者やメンシェビキによってザカフカス委員会が作られ，ソビエト・ロシアと手を切って，トルコ，イギリスなどの外国勢力と結びつき，これらの国に占領されていた．しかし，1920年春，北カフカスにソビエト政権が樹立され，アゼルバイジャンはその影響を受けてメンシェビキを追放して共和国を宣言し，同年アルメニア，グルジアにおいてもメンシェビキが敗北した．1922年3月，グルジア，アゼルバイジャン，アルメニアの三共和国は，相互に軍事，政治，経済同盟を結び，ザカフカス・ソビエト連邦社会主義共和国を形成し，ソ連に加入した（香山 1955：391-394）．

このような，民族的・歴史的特長を持つコーカサスにクラーラが入ったのは，その1年余り後，1923年のことであるが，先にソビエト政権が樹立された北カフカスと思われる．

(2) 1924年のコーカサスの旅とイスラム女性クラブとの出会い

翌1924年夏，秋から冬再びクラーラは北カフカスのシェリエスノボドスクに保養に出かけた．この温泉場で日本人片山潜と近藤栄蔵が会談している（近藤 1928：60）．写真が残

6　ドルネマンのクラーラ・ツェトキーンの伝記は研究書として書かれたものではないので，出典の明示がほとんどない．しかし，モスクワのRGASPI，ベルリンのSAPMOといったアルヒーフのクラーラのナッハラースの一つ一つに，検索したドルネマンの署名が多く見られることを筆者は確認している．

写真１　シェリエスノボドスク　ゴーリキーサナトリウムにて　1924.9【RGASPI/528/1/2039-28】

されているが（写真１），２列目中央がクラーラ，その右横は片山潜である．

この地でのクラーラの心境が，ドルネマンの伝記に書かれている（出所不明[6]）

「私は，まったくなにもしないで休養するようにと，厳重に命令されました．私にはたたかう世界は，くっきりとした稜線を描いてそびえたつ山々のかなたに行ってしまったように思われました．山は，あるいは高く頂上まで森につつまれ，あるいはむきだしの岩肌がけわしい傾斜をなしてシェリエスノボドスクの山峡をへだてていました．それは，葉を鳴らす柏，とねりこ，楓，こぶかしわなどの形で家々の庭や構内のベランダとか窓の近くまで前哨―あるいは落伍兵でしょうか？―をだしている，原始時代を思わせる堂々たるかつ葉樹林のまんなかにある，人里離れた山村でした．都会と呼ばれる大きな石の堆積の混乱と喧騒から逃れたい人は，人をいやす力のあるこの鉱泉で貴重な安静を見出すことができます」（Dornermann 1957＝1969 武井訳 316）．

少なくとも1924年９月12日には同行していたマクシムは，クラーラの年譜に，「シェリエスノボドスクで彼女が健康治療をしていた時，グルジアでメンシェビキの蜂起が勃発した．機会があり次第，クラーラは，現場の事態――蜂起の原因と結末等――を知るためにグルジアへ赴いた．蜂起とザカフカスの生活を多方面から調査し，同時にグルジアの首都チフリス（トビリシ），チャツーリ（Tschiaturi），バツーム，アゼルバイジャンのカスピ海に突き出たバクーでの一連の集会を催した」（SAPMO-BArch NY4005/57, Bl.87）と書いている．

この旅では，クラーラには前述ローザのカフカスの民族問題への言及や，ロシア革命とイスラムの関係（小松 2007：15-20）が意識されたであろう．彼女がソ連の民族政策に関心をもたないはずはなかったからである．ドルネマンは「彼女はまず，カフカス風の小さな馬車で山脈の北方を旅行した．そして農場を訪れ，男女の農民や労働者の代表と対談し，

村や地区のソビエトを傍聴し，ドイツ人移民を訪問した．テレク地方では，1,200人の代表が参加する大規模な女性会議に出たが，代表は，ほんのすこしまえまで，ベールを被って歩き，被抑圧者のなかの被抑圧者といわれていた女性たちだった．旅行は，ヴラディカフカズからさらに古い軍用道路[7]をへて，グルジアの首都ティフリス（トビリシ）へとつづいた．（中略）また，バクーを見学し，油田を訪問した」（Dornermann 1957＝武井訳317）と書いている．ここでの体験は，『コミュニスト女性インターナショナル』1925, 5・6号[8]に，「バツームとチフリスのイスラム女性クラブにて」という一文を残し，その後『解放されたコーカサスにて』（1926）という書物にまとめられた．

「バツームとチフリスのイスラム女性クラブにて」という論文の内容をかいつまんで紹介する．要点は下記のとおりである．

チフリスに1923年に女性クラブが出来たとき，40名の会員だったが，それは，疑う余地のない成果であった．活動が実を結んで，1年足らずで200名になった．集まった人々は「インターナショナル」を歌った．クラーラは，何度もこれまでこの歌を歌ったが「チフリスのクラブでのイスラム教の女性や少女の口から歌われるより，厳粛で，うっとりとした響きの言葉やメロディーをきいたことがありません」と言っている．彼女は集まった女性たちから革命前の生活の話を聞いた．貧困と，女性が家庭と子どもの世話に固定されていた様子を聞いた．ここに集まった女性クラブ員は，男女平等のための立法や，社会経済への女性の参加や，教育問題，教材について等多くを語っているさまがわかる．

「バツームでのイスラム教女性クラブでの夕べは，私がチフリスで偉大な文化的意味を持つ創作からうけた深い印象を確実なものとしました．ここでもまた，クラブの近隣の人々のなかのたくさんのイスラムの女性たちの一団は，さらに広い輪に影響が行き届く兆しをみせています」．

バツームのイスラム教女性クラブは，チフリスの姉妹クラブより若く，組織も小さい．最初は60名の加盟であったが，すべてが活動家である．バクーについては特に記していないが写真が残されている（写真2）．[9]

そのあともクラーラはコーカサスに保養に行くが，1927年2月6日にはコーカサスのキスレボドスク，トロッキーサナトリウムからヴェルフィへの手紙が出されている[10]．

このような経過からみて，クラーラが経験した東方とはザカフカスのイスラム教徒であ

7　1799年帝政ロシア軍が軍事用に切り開いたもの．トビリシとヴラディカフカズを結ぶ200kmの道．ロシアとコーカサスを結ぶ動脈的役割を果たしている．

8　この号には，日本を含む極東，近東の女性運動を把握する論文も掲載されている（Arbore-Ralli 1925:13-18）．

9　バクーの写真はドルネマンの伝記，バディアの伝記に1925年と記されている。しかし、マクシム作成の年賦によれば1925年は，クラーラは病気で伏していたので1924年の写真であることが推測される．

10　そこには，「お医者さんが私をコーカサスのミネラル浴に来させました．私は，ここに，弱って病気で着いたので，すぐベッドに横たわらなくてはいけなくて今日まで入浴できませんでした．」と書かれている（SAPMO-BArch NY4005/61, Bl.44）．

Clara Zetkin (+) mit dem Frauenaktiv Bakus, September 1924

写真 2　バクーの女性活動家といっしょに　1924.9（Zetkin 1960: 128の次頁に写真挿入有り）

り，極東というのは人的付き合いでは片山潜であったということができる．クラーラにとって東方，極東とは，ソ連が包括した限りでのムスリム女性，帝国主義的性格の日本という閾からそれほど出ていなかったのではないかと推測される．また，1920年代後半から開始されたソ連のムスリム攻撃が，コーカサスをよく知ったクラーラの目にどう写ったかを知る手がかりは今のところない．

3.「1930/31年のコミュニストアカデミーの国際女性運動の理論と実践の研究部門の当面の活動計画」

クラーラの手になる上記表題の資料が公表されたのは1974年のことであった．

このアカデミーは，もともと1918年10月 1 日に，モスクワで社会科学のための社会主義アカデミーとして開設され，1924年に名称を変えたものである．アカデミーのさまざまなセクションは，当面，社会主義の歴史，理論，実践の諸問題を研究し，広報するという課題をもっていた．1926年11月からは，社会科学と自然科学領域に拡大された．1927年 7 月 5 日，クラーラの70歳の誕生日にアカデミーに国際女性運動研究のセクションが創立され，その責任者となったのである[11]（SAPMO-BArch NY4005/78, Bl.69）．

このドキュメントは，モスクワの RGASPI にクラーラのナッハラース【RGASPI/528/1/1834】として保存されているが，クラーラとは筆跡の違う手書きのドイツ語原稿 9 ページと同一内容のロシア語 3 ページのタイプ版とからなりたっている．手書き 1 ページ目を写真で示す（写真 3）．筆者は，このオリジナル文書からではなく，カチャ・ハーフェルコーンとハインツ・カールが，レクラム文庫に収録した，活字となったドイツ語（Zetkin 1974）

11　1936年にアカデミーは解散し，その研究所と会員は UdSSR の科学アカデミーに移った．

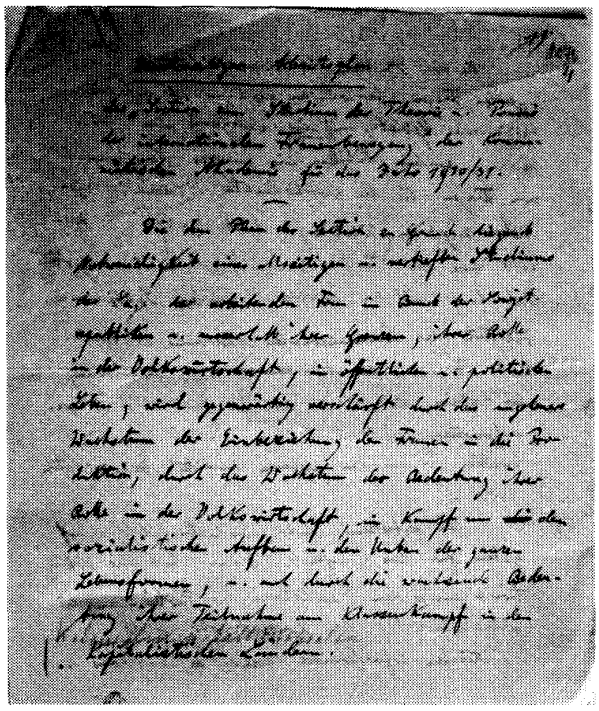


写真 3「1930/31年のコミュニストアカデミーの国際女性運動の理論と実践の研究部門の当面の活動計画」の手書き最初の 1 ページ【RGASPI/528/1/1834】（但し，クラーラの筆跡ではない.）

から読んでいる[12].

この活動計画はきわめて包括的なものであり，具体性に欠けるが，ここでクラーラがイスラム，アジア，非資本主義圏をどの程度捕捉していたか見ておきたい．この文書の冒頭は次のように書かれている．

「研究部門の計画の根底にある，ソビエト共和国連邦内の，そしてその国境の外の労働女性の状態，彼女たちの国民経済における，また公的・政治的生活における役割の全面的で深い研究の必要性は，今日，女性の生産への包括の大規模な増大を通じて，社会主義建設と全生活形態の革新における国民経済内での彼女たちの役割の意味の増大を通じて，また，植民地及び半植民地（的）資本主義諸国内の階級闘争への彼女たちの参加の広がりの意味を通じて重大化している．

われわれの研究部門を通じての研究に通底している問題は，一特別の領域，すなわち，問題の一カテゴリーに限定されるものではなく，さまざまの経済領域や社会的生活領域（経済，立法，歴史等）に属する諸問題の全混合物から成る．だから，この問題の研究は，コミュニストアカデミーの他の部門や研究所とのもっとも密接な結びつきにおいて行われ

12 1974年当時は【IML, ZPA, NL 5/29】として保存され，1974年にはじめてレクラム文庫に収録公表されたとのことである．1930年のすべてと31年の秋まではクラーラはドイツにいたはずであるから，ドイツで書かれたものと思われる．

13 die Frauenarbeit を女性労働と訳した．

14 die weibliche Arbeit を女性の労働と訳した．

なければならない」.

少し飛んで,「1930年から31年の計画は次のテーマの仕上げを予定している」として以下のように箇条書きされているが，内容的にはきわめて膨大なものである.

1. 女性労働[13]（女性の労働[14]－アレクサンダー同志の文献研究－の理論的，歴史的研究の成果）
2. 生産の合理化との関連でソビエト共和国連邦における女性の労働
3. 諸国の農業経営における女性労働（集団的－ソビエト経済における女性の労働の使用，日雇い女性労働者の問題）
4. 企業でのサービス労働への女性労働力の利用（コミュニストアカデミーの共同セクションとの共同で）
5. 労働（ママ？）と新しい生活形態の必要条件にあわせた労働者のサービス（扶助）の再建（構築）の選択
6. 労働者の生計問題
7. 階級闘争における女性（どのテーマが，ソビエト建設研究所プロレタリア独裁部の論集「建設期における階級闘争とプロレタリアートの独裁」の一部をなすべきか．これでよい）
8. ソビエトの女性
9. 東方の女性（die Frau des Ostens）についてのソビエト立法の実践と実行
10. 10月革命の影響下でのソビエト東方における家族関係の変化
11. 女性問題におけるイスラム教聖職者の戦術
12. 労働者の生活形態の社会化の経済的必要条件（コミュニストアカデミーの共同セクションとともにゴスプラン[15]のコーボ同志の講演）
13. ソ連の諸条件のもとでの，および資本主義諸国における人口問題（社会衛生研究所のグレヴイッチュ同志の講演）
14. 資本主義諸国における戦後の国民経済のなかの女性労働（仕事は主にコミュニストアカデミーの世界経済研究所の力で遂行されるだろう）
    A)アメリカ合衆国－ボーゲン同志
    B)英国
    C)ドイツ
    D)フランス
    E)ポーランド
15. 極東の女性の経済的，一般的状況（日本，中国，インド，インドネシア）；中国の農民

15　ソ連の国家計画委員会

女性の状態についてのアンケートの仕上げ（資料・文献のさらなる収集）.

16. ロシアにおける女性労働の成立と教育（コミュニストアカデミー経済研究所個別専門委員会の活動計画に含まれるべきテーマ）
17. 1905年の革命運動のなかでの女性労働者（労働女性，女性プロレタリア？）（進んだ聴衆のための講演）
18. 旧ロシアの革命運動のなかでの女性（過程の資料のために—文献の仕事）
19. 10月革命と市民戦争のなかでの女性（記録の収集と整理，文献論文の編集）
20. パリコミューンにおける女性
21. 女性問題についての第二インターナショナルの理論と実践（記録の収集）
22. 前夜および大フランス革命の初期段階におけるにフランスの革命的女性クラブ（歴史研究所のゼミナールのためのテーマ）
23. 大フランス革命の時代の人民連合と革命委員会の中での女性
24. 女性問題に関するユートピアンの見方

これらに関して，科学研究論文は，三つの方向に進め（文献の収集と整理，講演の組織，文献的論文の編集），組織的関係における緊急の課題として，他のセクションとの連携の必要性が具体的に示されている.

この文書では，第1に，冒頭から，「植民地及び半植民地（的）資本主義諸国内の階級闘争への女性の参加」の重要性が視野に入り，第2に，東方の女性（die Frau des Ostens），ソビエト東方における家族関係，女性問題におけるイスラム教聖職者の戦術，が意識されている．第3に，極東の女性の経済的，一般的状況（日本，中国，インド，インドネシア），中国の農民女性の状態についてのアンケートの仕上げ（資料・文献のさらなる収集）など，具体的国名や活動の目標が掲げられていることが特徴といえる.

むすび

以上のように，1920年代からクラーラは，女性問題を取り上げる際に，コミンテルンの女性政策と結びついて，非資本主義圏や東方に目を向けた．東方は，コーカサス地域のイスラム女性にはじまり，極東の日本に及んでいる．このことは，西欧キリスト教国中心の先進国プロレタリア女性運動の経験をもつクラーラにとって，新たに開かれた視点であっただろう.

しかし，日本の側から見れば，1920年といえば，女性参政権と女性の社会的地位をめざした女性団体「新婦人協会」が設立され，1921年には山川菊栄らの「赤欄会」が結成されていた．1922年には山川らが「八日会」を組織し，「露国飢饉救済婦人有志会」を起こし，翌1923年に日本で最初の国際女性デーを開催する活動を行っていたのである．山川菊栄は，コミンテルンの創設から動向を見守り，クラーラを中心とするコミンテルンの女性政策を

把握していた（伊藤 2003：129-138参照）．1933年のクラーラの死は同年7月17日発行の『輝ク』（第5号）に，「クララ・ツェトキンの訃」としてクループスカヤと2人の写真入りで報道されている．

フランスの空想的社会主義，パリ・コミューンの思想にも遡られるクラーラの女性解放論は，SPD，第二インターナショナル，コミンテルンを経て，1933年の段階で東方への視点で終わった．年齢的，肉体的限界がそれを超えることを遮った．しかし，1930年から31年の研究プランは，過去から（当時の）現在，そしてクラーラらしい，社会主義の近未来を射程に入れたものである．この計画は，もはや論理的筋道は乱れているようにみえるとはいえクラーラの女性解放論が包括した世界のすべてを含んでいる．

今日の国連の女性政策をはじめ，その理論的背景をなすフェミニズム・ジェンダー論は，WID や GAD の観点から，あるいはポストコロニアル視点から，世界の女性・ジェンダー問題を対象としているのは周知の通りである．今日のフェミニズム・ジェンダー論は過去の蓄積・到達に負い，その上でのパラダイム転換，あるいはその否定の上での発展が可能であった．

クラーラの没後75年に当たり，クラーラのこの研究プランとの理論的接点は，日本では人的には山川菊栄にあったことを再認識する．しかし，山川によってもこれは切断され，やがて否定されている．歴史的趨勢を先読みした山川の「聡明」な判断であったのかもしれない．

女性解放論を19世紀，20世紀，21世紀と繋ぎ，フェミニズム・ジェンダー論へ繋ぐ課題は，依然として筆者に負わされたままである．この問題については今後の課題としたい．

引用文献

荒畑寒村（1961）『寒村自伝』論争社，東京.

Arboré-Ralli, E（1925）Anfänge des Erwachens und der Bewegung der Frauen im nichtsowjetisvhen Oreint, *K-FI,* H.5/6.

Badia, Gilbert（1993=1994 Florence Hervé und Ingebourg Nodinger）*Clara Zetkin, Eine neue Biographie,* Dietz Verlag Berlin GmbH.

Dornemann, Luise（1957,1962,1973）*Clara Zetkin, Leben und Wirken*, Dietz Verlag Berlin.（邦訳：1957年版，武井武夫訳(1969)『解放運動の母，クララ・ツェトキンの生涯』新日本出版社）東京.

Hervé, Florence（Hrsg.）（2007）*Clara Zetkin oder : Dort kämpfen, wo das Leben ist,* Dietz Verlag, Berlin.

糸川紘一（2007）「トルストイとコーカサス」『ユーラシア研究』No.37, 53-55.

伊藤セツ（1984）『クララ・ツェトキンの婦人解放論』有斐閣，東京.

伊藤セツ（2003）『国際女性デーは大河のように』御茶の水書房，東京.

香山陽坪（1955）「カフカーズ」岩間徹編『世界各国史Ⅳ　ロシア史』山川出版社，東京.

小松久男（2007）「ロシア革命とイスラーム：中央アジアを中心に」『ユーラシア研究』No.37, 15-20.

近藤栄蔵（1928）「クララ・ツェトキン」『文芸戦線』第5巻第3号.

松原セツ（1969）『クララ・ツェトキンの婦人論』啓隆閣，東京.

村田陽一編訳（1979）『コミンテルン資料集』第2巻，大月書店，東京.
ルクセンブルク，ローザ（1908-09＝1984加藤一夫・川名隆史訳）『民族問題と自治』論創社，東京.
Puschnerat, Tânia（2003）*Clara Zetkin, Bürgerlichkeit und Marxismus, Eine Biographie*, Klartext, Essen.
Zetkin, Clara（1925）Im mohammedanischen Frauenklub zu Batum und zu Tiflis, in: *Die Kommunistische Fraueninternationale*, Jahrgang 5, Mai/Juni 1925, 37-48.
Zetkin, Clara (1926) *Im befreiten Kaukasus*, Berlin, Wien.
Zetkin, Clara（1960）*Ausgewählte Reden und Und Schriften*, Bd.II, Dietz Verlag.Berlin.
Zetkin, Clara, Hersg. Haferkorn, Katja und Heinz Karl（1974）*Zur Theorie und Taktik der Kommunistischen Bewegung*, Verlag Philipp Reclam jun, Leipzig.

（いとう　せつ　　大学院生活機構研究科生活機構学専攻教授）